

第3回水辺の楽校協議会が開かれました。

第3回水辺の楽校協議会が平成10年3月27日に緑区役所で行われました。市民・行政あわせて21名が参加し、協議会の活動方向および今後の具体的な活動の中身について話し合いました。

●活動の方向について

① 自然との直接的なふれあいが今一番大切

- ・今、子どもたちにとっては自然の変化を身近に感じる事が重要である。
- ・子どもは勝手に川に入るのが好きで体験を通して自然を学ぶ。今の子は全然遊び方を知らないと言うが、機会を与えさえすれば遊ぶものだ。
- ・小さいときに自然の中で目を輝かせるような体験をすると、自然への優しさや人への思いやりを身につけることにつながる。
- ・川の楽しみ方を知らない世代が増えている。子ども社会にタテ社会が薄れてきている。今や親→子→孫へではなく、子どもを地域で育てる視点が必要である。
- ・子どもと一緒に地域の自然にかかわろうと考え、「新治の谷戸で遊ぼう会」をつくった。
- ・子ども、先生、親と一緒にしかかわれる体験イベント（森へ入る、親子で歩くなど）が必要である。
- ・学校の裏の谷戸を探索するプロジェクトをやりたい。そして、「地域の人物マップ」をつくりたい。子どもたちが地域を歩いて、地域のことを教えてくれる人を自分で探し、人に話を聞くことで自ずと人を敬う気持ちが身に付いてくる。

② 川や里山の維持管理は市民の協力で

- ・三保、新治の川や里山は人の手が入り維持管理されてきたことで自然環境が残ってきた。
- ・森の下草刈り、除間伐、川掃除など手をかけてやらないと多様な自然は残らない。
- ・人がかかわっている川はきれい（ゴミも少ない）。1960年代の川に戻していきたい。
- ・現状では、川や里山の管理は様々な市民のネットワークでやっていくことが必要である。

●今後の運営について

・今後の具体的な活動

このような話し合いの結果、事務局からの提案をもとに、一本橋下流の工事一部完成を祝う柳の挿し木イベント（4月18日）や「梅田川流域マップ」づくり、「杉沢上堰の清掃、カイボリ（5月ごろ）」などを協議会のプロジェクトとして取り組んでいこうということになりました。

・水辺の楽校新聞や、協議会の愛称について

「梅田川・水辺の楽校新聞」については、「もっと多くの人々の素直な意見交換の場にしよう」「全戸配布を考えるならば一般の人が読んで楽しい内容にした方がよい」「配布方法としては、当面は地区センター、区役所、土木事務所などに置く」等の意

見が出され、新聞の発行は協議会とし、連絡先を下水道局とすることになりました。

また、この協議会の愛称について、大槻さんの提案をご紹介いただきましたが、時間の関係上、話し合いを継続していくことになりました。



班日誌

梅田川に関心ある人の新聞としての「水辺の楽校新聞」のあり方について編集部では少しづつ話し合いを進めていきたいと思ひます。読者の方で興味ある方は編集部までぜひご連絡下さい。

徹夜で仕上げた「川あそび」いかかでしたか？今夜は梅田川の音も耳からぐすり眠ります…
じゅだきよみ

梅田川のヘソ「杉沢上堰」を守ろう
(堰と緑グループ) 大槻

梅田川縁の「ゆきやなぎ」数十本が満開！甘い匂いがいっぱい！
新治小だて

5月には、また水の生き物調査をしたいと思ひます。
酒巻

梅田川水辺の楽校新聞

第4号

■発行日
平成10年4月18日
■発行
梅田川・水辺の楽校
新聞編集部
■事務局
横浜市下水道局
河川部
TEL045-671-2859
FAX045-651-0715

川づくりワークショップと協議会の合同でワークショップが行われました。これまで5回行ってきたワークショップの作業をふまえ、36人の参加者の皆さんで、対象地区の川づくりプランをつくり、発表しました（第2面記事）。

これに先立ち、お二人のゲストから話題提供をいただきました。まず、竹田先生より大岡小学校での取り組みや環境教育の視点から「水辺の楽校」への期待などをお話いただきました。また相沢さんからは、杉沢上堰のそばにある「お滝様」について、興味深いお話をいただきました。

子どもに欠けている3つの「間」

竹田 惇子先生のお話

「水辺の楽校」プロジェクトへのかかわりは、オゾン層破壊や地球温暖化といったマクロの視点からだけではなく、身近な環境から環境問題を考えようということで、当時赴任していた大岡小学校のそばの大岡川をつかった環境教育に、子どもたちと取り組んだのがきっかけです。

現在の子どもの間には、時間の間、仲間の間、空間の間の「3つの間」が欠如していると思ひます。これは、時間的な余裕や、異年齢・異世代との交流、そして、遊び場や遊びの内容が乏しくなっており、特に自然体験においては、子どもが自然の営みについて無知なため、危機管理能力が欠けているためといえるでしょう。

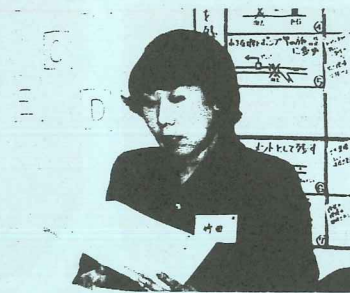
また、親もその例外でなく、親子ともに自然体験が今とても必要です。素晴らしい環境をつくっていくためには、学校・行政だけではなく、家庭など地域全体を巻き込んだ取り組みにしていくことが大切であり、「水辺の楽校」の梅田川での取り組みが、横浜における先駆け、モデルになることを期待します。

「お滝様」は地域の歴史の証人

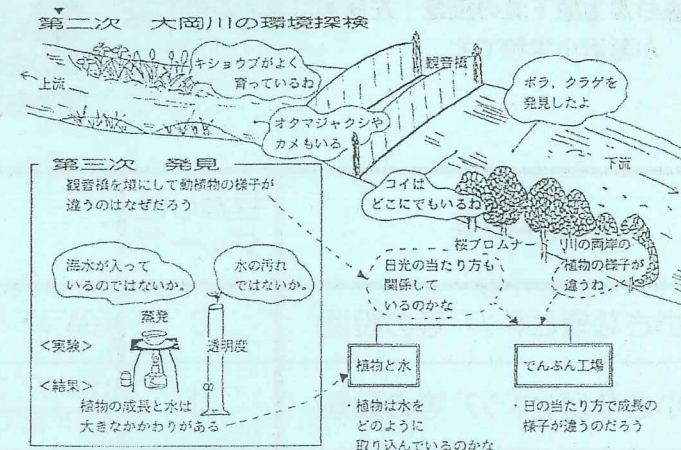
相澤 雅雄さんのお話

「お滝様」は、不動明王の石像で、高さ約73cm、上部の幅約30cm、下部幅約33cmです。裏側を詳しく見ると、延享元年6月（江戸中期、1744年）の年号とともに、「刈谷」、「佐藤」、「杉崎」、という江戸時代から梅田川付近に住んでいた各氏の名が刻まれています。

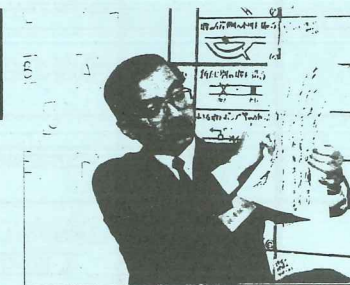
江戸中期ごろ、本山を離れ地域に密着した「里修験」が広まるにつれ不動信仰が盛んになったようで、「お滝様」はこの地域でその信仰が組織的に行われていたという歴史的証拠でもあります。（そして、当時の信仰を示す杉沢の杉崎家を「正伝房」という房号に認定した当時の貴重な文書や、



竹田 惇子先生：
横浜市教育委員会
元 大岡小学校教諭
「水辺の楽校」プロジェクトを具体化するために設置された「河川の教育に関する懇談会」の委員。



△大岡小学校での取り組み資料から抜粋



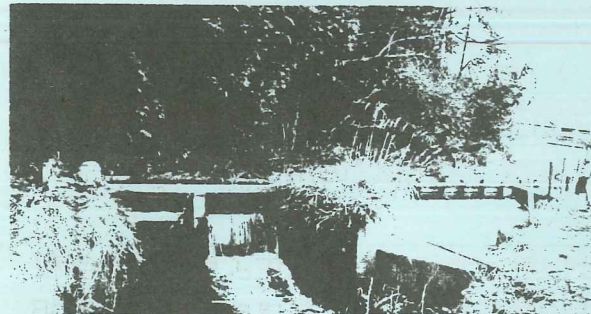
相澤 雅雄さん：
郷土史研究者
緑区史編纂などにかかわっておられ、第1回目のワークショップでも、梅田谷戸の暮らしと歴史についてお話しいただきました

出羽三山の護符である「腰梵天」の複製を見せていただきました。

皆さんが（お滝様のような）地域の歴史に関心を持ちながら直接触れ、本だけでは得にくい体験をしていただければ歴史家としてとてもうれしく思ひます。

5つのグループから7案が出されました

前回で対象地区の細かな調査を行い、これを受けて今回はグループ毎の案をまとめました。どのグループもとりにまとめたに向けた活発な話し合いが行われました。最後に5つのグループから7案の発表が行われました。発表後に作業時間の関係で十分にな話し合いができず、ワークショップ全体としての案としてまとめるため、4月18日に新たにワークショップを行うことになりました。またプランの途中段階のグループは後日「水辺の楽校の補習」を行い、提案内容を整理しました。ここでは、それら補習の内容を踏まえての結果を紹介します。



杉澤上堰を下流側から見たところ。右側は、余水吐です



杉澤上堰下流の風景 左岸側に見えるのが新治小学校です



梅田川の旧河道との合流部のようす。今の「三角地」は藪になっています



堰の右岸側にある「お滝様」由緒のある石造であることが分かりました



| 基本の案 | 提案したグループ | 取水の方法 | ゾーン |
|----------------|----------|------------------------|--------------------------|
| | | | 右岸側 |
| 1 小さな堰とポンプ等の設置 | C | ①ポンプによる取水 | ・なるべく今の状態を維持する |
| 2 小さな堰とポンプ等の設置 | C | ①ポンプ施設 ②下流で直接ポンプアップ | ・斜面林は残す(林の管理のためにも小径) |
| 3 左岸に振る | B | ①上流で分流 ②南側の用水を使用 | ・自然のままゾーン |
| 4 左岸に振る | A | ①堰の余水吐を大きくする | ・今のまま一保全区域 ・ボランティアで管理 |
| 5 左岸に振る | D | ①転倒堰を新設する | ・一部人の近づきやすい整備 ・説明板の設置 |
| 6 左岸に振る | E | ①南側の用水を導水路を使って渡す | ・林の中に入れる小径(お滝様の前を通れる) |
| 7 改修しない | E | ・現状のまま維持 | ・現状のまま維持 |

※第5回ワークショップ当日のまとめの作業に準じて整理したため、提案したグループの順序がばらついています。ご了承下さい。

| ゾーン | | その他 |
|------------------------|---------------------------|--------------------------------|
| 左岸側 | 三角地 | |
| ・川の中に遊べるしかけ ・落差工を設置 | ・憩いの空間とする ・自分たちで植える花畑 | ・水生生物にやさしい場所づくり ・周辺住民と一緒に管理 |
| ・堰を移築 | ・学び、遊びの場 ・遊歩道の設置 | — |
| ・川に親しむゾーン | ・土に親しむゾーン | ・みんなで維持管理する |
| ・シノ竹林 | ・オニグルミを残す ・先端部は湿地状にする | ・U字溝をサワガニ水路にする |
| ・右岸側を眺めるような雰囲気 | ・オニグルミをシンボルツリーとして保存 | ・滝の復元 |
| ・堰を移築 | ・子どもと大人がともに学び遊べる ・春の小川 | ・ゆっくり歩く遊歩道一歩くのを楽しむ 静かなところ |
| ・現状のまま維持 | ・現状のまま維持 | ・堰の利用がなくなった時の理由がない ・堰の補修が必要 |

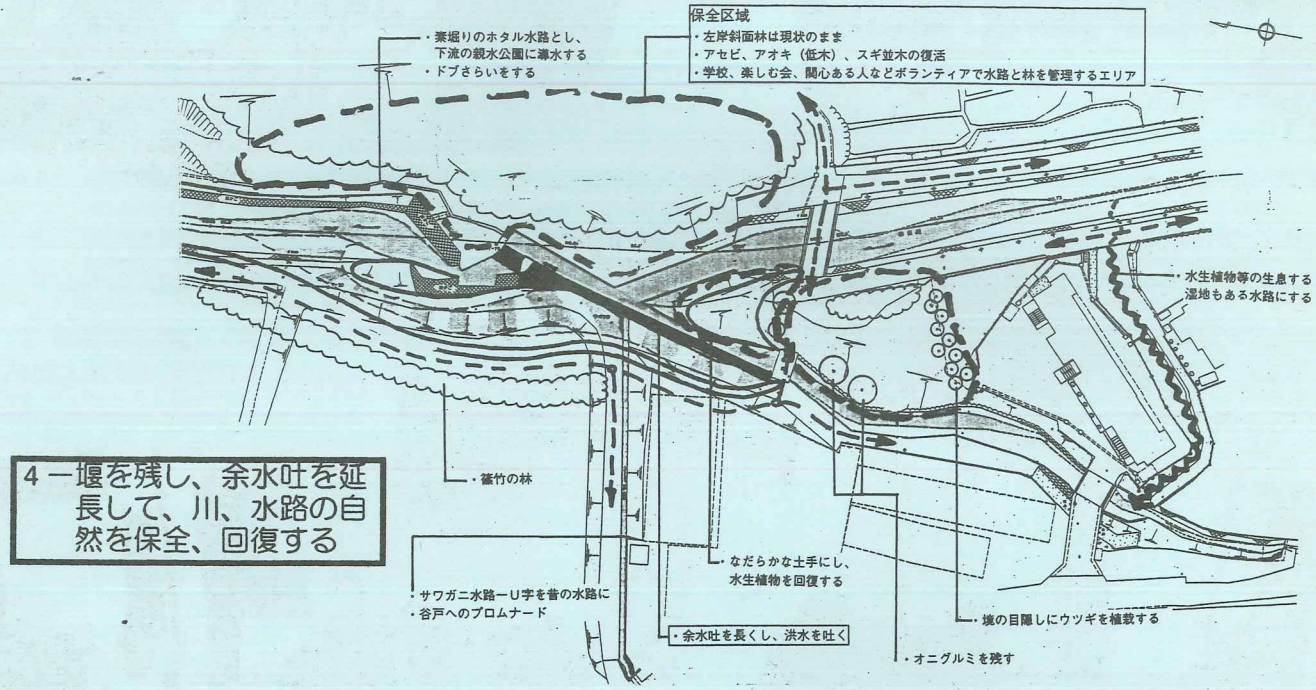
※この表は各案の考え方を代表するようなコメントを抜粋してまとめたものです。詳細については、P 4~7で図と共に紹介しています。

Aグループ～堰と緑

テーマ：昔の自然に戻し、水利と景観を保とう

堰下の右岸には、スギの並木を、左岸には篠竹の林を復活させて護岸し、梅田川の昭和初期の自然に戻す。田んぼへの水利用掘削もそのまま残して必要があればボランティア活動で溝掃除をする。田んぼへの水利用の必要性がなくなっても掘削には水を流してホテルの棲み家とする。三角地のオニグルミの木を残し、民家との界には、昔あったウツギの木を植えて自然の景観を保つ。この案が実現すれば、右岸傾斜地の緑を背景に、さらに緑が増えた水域は、堰から落ちる水の音が奏でて、堰と緑に加えて音が醸し出す立体的な梅田川のヘソとなる。

文：大槻孝

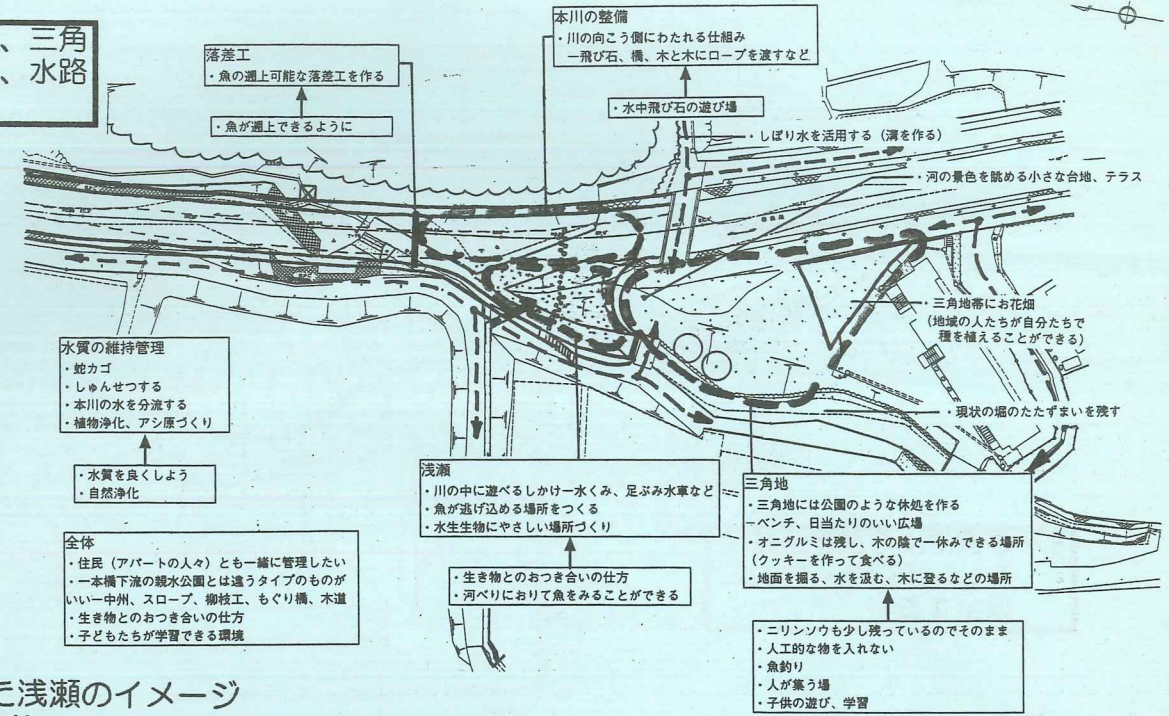


Cグループ～ホテル

私たちCグループの案の第一の売りは、おそらく、用地買収も要らず、まずお金がかからないことです。いちばん現実的です。が、とても夢のあるプランでもあります。クルミの木を中心とした三角地の川べりの眺めを、できる限り自然のまま残しつつ、子どもたちの遊びと学習の場として、また大人も子どもも集える場として、活用したい。水生生物にやさしい場所づくりを目指し、一帯から浸み出しているしほり水を上手に使う水質改善も可能とされます。

文：中島 明子

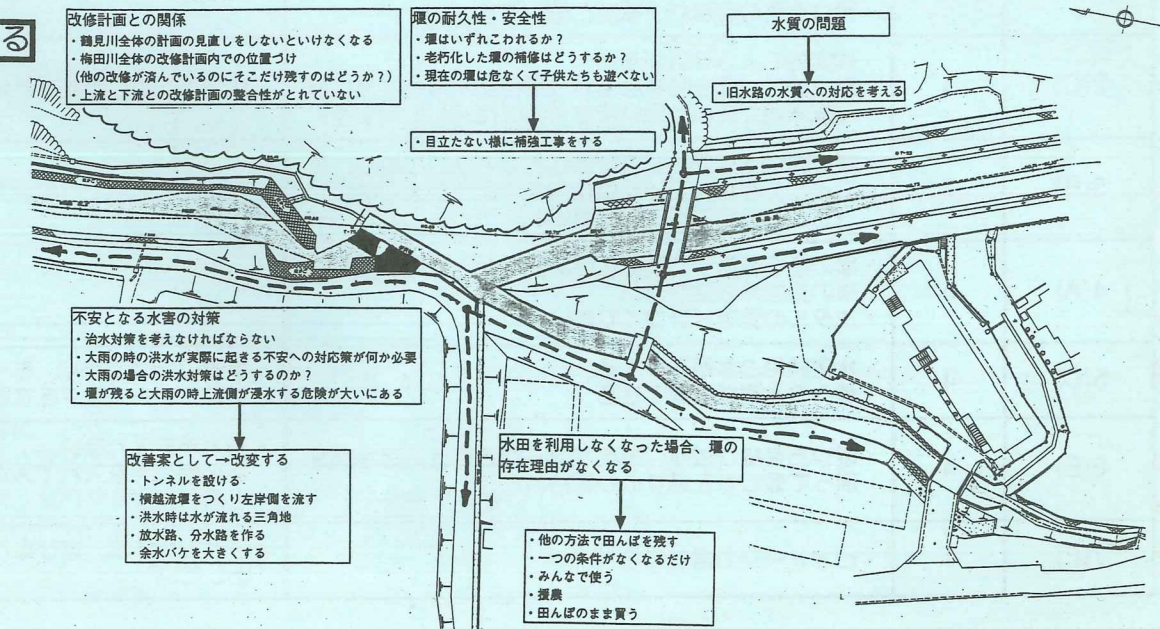
2-現計画で改修し、三角地を中心に旧川、水路を活用する



沢田さんの描いた浅瀬のイメージ



1-現状のまま維持する

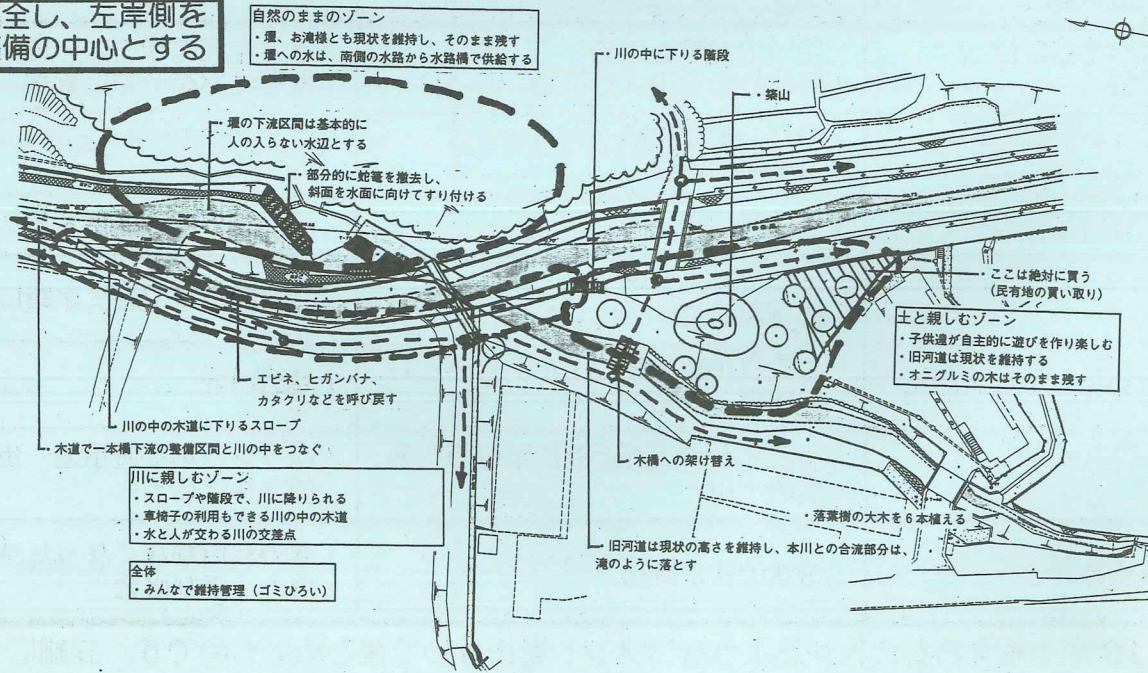


Bグループ～ネムノキ

- 夢の三角地の私有地を絶対的に買い取る。ここを子どもたちが自主的に遊べる「土に親しめるゾーン」とする。落葉樹の大木を等間隔に六本植えて、木登り・木上小屋や落ち葉を集めてマット代わりにダイナミックに遊ばせる。
- 川は左岸に振り、「川に親しむゾーン」をつくる。土手には、彼岸花・かたくり・エビネ等を植えて四季を楽しむ。中州をつくり、葦・黄菖蒲等を植えて、その間をぬうように木道をつくり、車椅子でも通れるようにする。

文：伊達 鎮

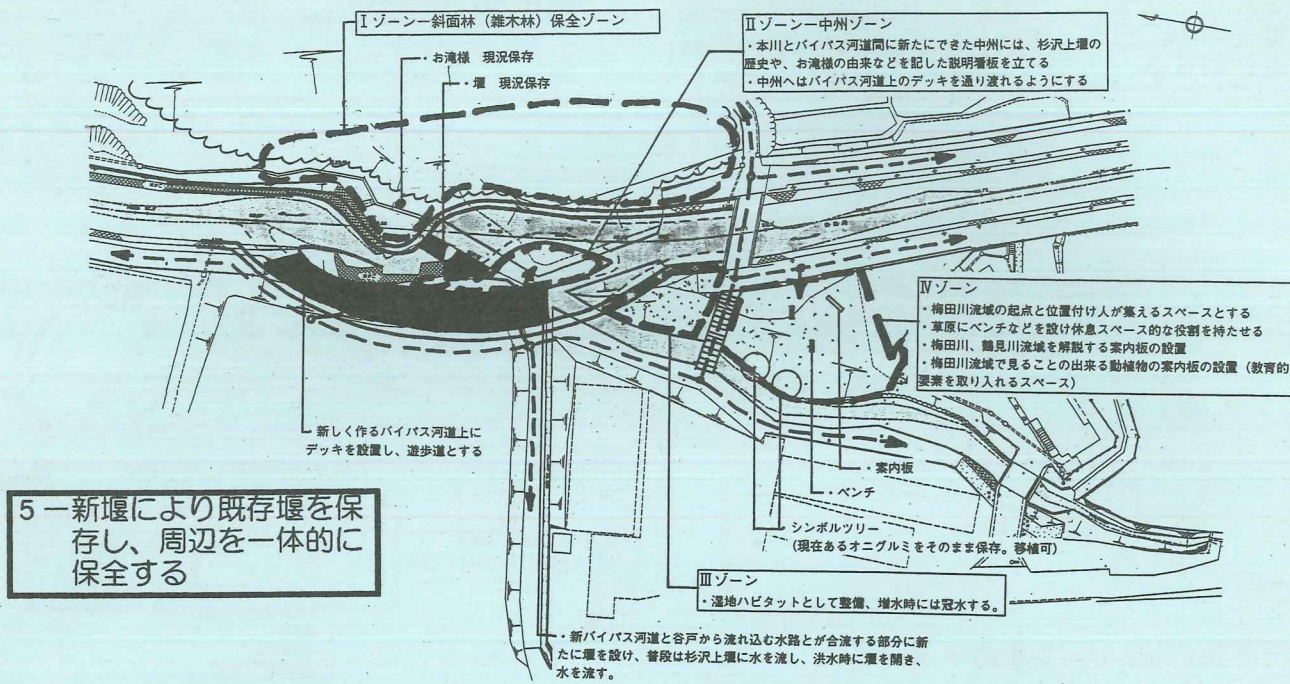
3-堰を保全し、左岸側を親水整備の中心とする



Dグループ～オニグルミ

まず、堰、お滝様、オニグルミの木、右岸の斜面林を残すことを前提とします。この四つは、ここになくはならない大切な風景です。

堰、お滝様は文化遺産として、オニグルミの木はシンボルツリーとして保存し、斜面林はカワセミの営巣地として保全、管理が必要だと思います。あまり手を入れない、四季折々、変化する景色にこそ、人を引きつける魅力があると思います。南側の水路、三角地も活用して思い思いの水辺が楽しめるようにと考えます。 文：遠田 文恵



5-新堰により既存堰を保存し、周辺を一体的に保全する

第5回アンケートのまとめ その1

第5回のワークショップの最後に、各案への投票を兼ねてアンケートをお願いしました。特に7つの案に対しては、おもしろい結果が得られました。必ずしも自らの案に投票しておらず、参加者のみなさんの興味や関心がどの方向に向けられているのかがわかるような内容となりました。

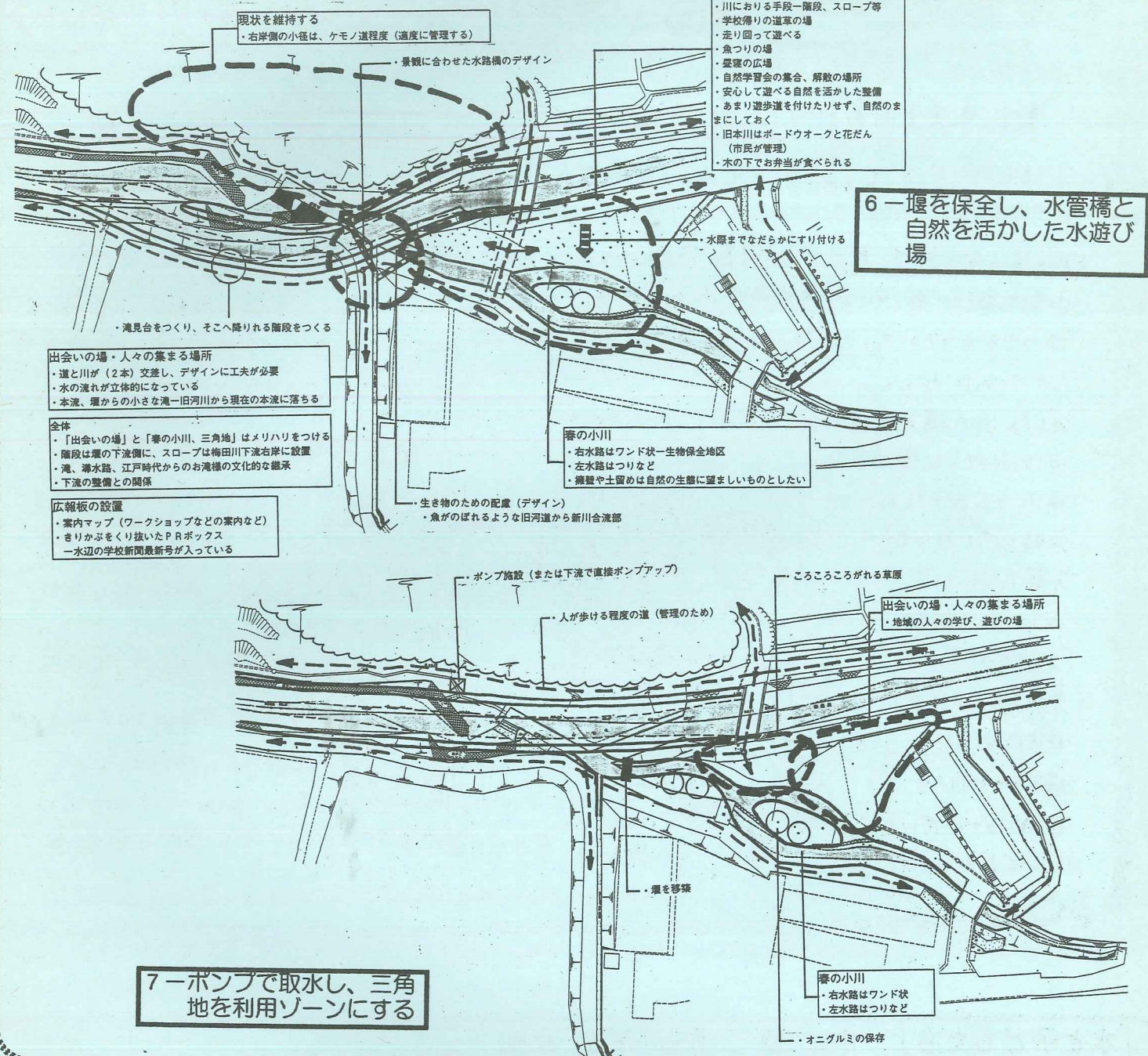
| 案の番号(グループ) | 得票数 | 理由 | さらに良い案にするためには… |
|------------|-----|---|--|
| 1(C) | 2 | ・どのグループのプランが一番よいかを考えてみて、それぞれ良い案があります。どれが一番か、私の本音は自然のままが一番だと思います。 | ・自然を大切に考えたいと思います |
| 2(C) | 4 | ・現実的のような気がする ・個人的には堰を残すならやっぱり増水分を下流に運ぶ放水路が良いと思います(直に梅田川に流す等) | ・生物のためには堰など無い方がよい |
| 3(B) | 7 | ・堰にいく水量が心配だが案はとても良いと思う。常に子どもと接している校長先生の意見が実によい。 →子どもたちが自主的に遊ぶという考え | ・実際に子どもたちの意見も聞いてみる |
| 4(A) | 6 | ・堰の高さを低くするなどには必要だが、固定式なら将来の管理の必要がない ・ホテルの里をぜひつくりたい | - |
| 5(D) | 4 | ・水害時用の水路をつくる ・堰への水量が確保できる | ・堰周辺だけでなく、もっと広い範囲もプランづくり、ゾーニングをする |
| 6(E) | 4 | ・堰やお滝様が残る、環境が守られること。導水路を通過して堰に水を通すのが面白いこと | ・極力手を入れない ・最小限の手を入れて人が歩ける方がおもしろいと思います |
| 7(E) | 1 | ・ピオトープの場づくり | ・子どもが学ぶ、遊び場として豊かな空間を作り出したい |

Eグループ～カワセミ

これがE班だ!

その名も「春の小川」。キーワードとなるのは、「出会い」。人と生物が、人と人が、また人と歴史が出会う場所。私たちは、そんな杉沢上堰周辺をイメージしました。(コンセプト)

堰は、「その機能とともに残したい!」との思いから、「左岸側から導水管で堰に水を送る」という案が生まれました。 文：関森 幸恵



第5回アンケートのまとめ その2

また、当日のワークショップの印象なども伺いました。主なものを紹介します

- ・話が具体性を持ちはじめたので、大変楽しかった。
- ・難しいところもあったが、形が見えてきたときは興奮した。この気持ちを持続すればみんなで管理することもできるのではないかと。
- ・“森の自然”は良いが、全くそのまま森の自然が保たれるかどうか考えてほしい。
- ・みなさんそれぞれに思い入れがあるのがわかって有意義でした。
- ・堰を残すという点でほとんどの参加者の意見がまとまって、とりあえず胸をなで下ろしています。
- ・堰が何年程度もつのか不明である。

梅田川 地元の長老に
うかがいました

昔の子どもの川遊び

By さゆ子 きよみ

今回は生まれてから
現在まで三保町
在住という、女性の方
5名にお話をうかが
いました。



西谷ナカ江さん
昭和11年生まれ



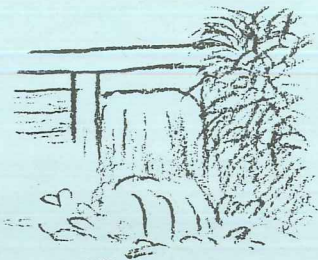
岩本悦子さん
昭和8年生まれ

おたきさまのあたりは昔はね...

川のまわりには、ずっとシコダケ(ササ)がはえてたから
川の水が見えるのは、おたきさまのあたりだけだった。
あの橋の用水路は、戦争中は避難場所だね、
こっちは木がたくさんで、反対側(今の新治小側)
はウツギやケヤキがたくさん茂ってたから、空からも見え
なかったんだねえ。

みんな川の橋の小道を、通って学校に行ってたけど
川におっこって、着かえに

帰った子もいてね。
学校についたらもう
お昼だったりして
ねえ...。帰りも
コマゲタはいたまま
学校橋(今の新治小
の正門脇)から
堰の下まで川の中
をジブジブ歩いた
もんだよねえ。



ドンドン

堰の下の水が落ちる
ところを「ドンドン」と
言った。

おたきさま(杉沢上堰)のドンドンには、ヤツ
ウナギやドジョウがいっぱいいた。学校の帰
りに、カバンをちのけてとっていた。

タニシもおもしろかった

ドジョウは父がよくとってきてね、塩でゴリ
ゴリやってヌマ(ヌメリ?)をとってから、お湯で
ゆでた。ドジョウを見ると、私も「食いたい
なあ」と思ったもの。

タニシもいろいろあったけど、タニシは釜炊き
すると、タニシが出てすごくおいしいのよねえ。

井天様

梅田谷戸の守り神で、今も
ある。昔はこの下の川には
シジミがたくさんいた。また川辺には
ジュズダマがずっと茂っていた。



佐藤花子さん
大正10年生まれ



守屋八重子さん
昭和5年生まれ



杉崎コマさん
大正12年生まれ

98.2.7
三保町自治会館にて
参加者/大槻、岡森
松林、鈴木
柳、沢田



ジュズゴ

(ジュズダマ)

果をお手玉の中に入れる。
ジュズゴでつくった
お手玉は音がいい。

お手玉のいろんな遊び方もみんな
自然に覚えた。子守りしながら
また、学校の帰りにも、お手玉をや
りながら帰ったりしたもんだよねえ。



イタチ
イタチをとる商売の
人がいてね、



橋の下にしかけて

「イタチあつてんかなー」

なんて言いながら見に行っていました。

(編注:今もイタチはあの辺にはいるそうです。)

西谷戸の川、かすの川

昔は「梅田川」なんて言わなかった。「西谷戸の川」とか
「南谷戸の川」とか「上(かす)の川」とか言っていた。上(かす)
っていうのは谷戸の奥のことだね、谷戸全部を合わせて
「梅田谷戸」って言ってたよ。今、子どもの頃の川の面
影が残っているのは、一本橋の橋の木のあたりだけだね。

川に納める

お盆様にはよくマコモ(カヤより少し幅が広い
川辺の草)を馬の形なんかに編んで、川の土手
にさしておいたよ。「川に納める」ってかんじだね。
いつの間にか川に流れていって、無くなってるん
だけど、七夕がざりなんかもそうしたよねえ。

川端参り

(かわばたまいり)

お産して11日めに
おばあちゃんか、
赤いぼろを包んで

井戸と川へお参りに行く。

川でおしめを洗わせて下さい
ってね。お米を半紙で包んで
川の端へ置くんですよ。

そして母親(産婦)も

その日から水を
使っていて
言わぬと
ものですよ。



(編注:この他にも三保の地域の古からの年中行事
などもいろいろお聞きしましたが紙面では川に関するこ
とにしぼり、省スペースしていただきました。)

「水と子どもたち」 伊達 鎮 (新治小学校 校長)

赤ん坊が最初に「もの」を認識するには、動くものを追うところからはじまります。しかも流れるような動きにやすらぎを感じ、満たされると再び眠りに就きます。それは遠いむかし、人類が水の中から生まれ、長い歳月を掛けて人となったことと深い関係がありそうです。そういえば、胎児の最初の姿は魚の形をしています。水は人間の「ふるさと」なのです。

本校すぐ裏の梅田川の周りは、今まさに春の旬です。新学期を待ちかねていたように、子どもたちと先生たちは散策に出掛けていきました。

「せんせい!みつけた!」「先生冷たい。でも気持ちいい!」「静かに。うぐいすが鳴いているよ」遠く近くから、子どもたちの歓喜の声が聞こえてきます。ひよどり、きじばと、つばめたちもつられて、元気に飛んでいます。

今、傷害事件が義務教育年齢にまで及んできました。これまでの教育が問われています。「知識偏重」で忙しい生活を強いられた子どもたちの、「逆襲」かもしれません。小さい頃から自然とふれあい、ゆったりと優しさを育てることも、これからの学校教育には必要だと思います。その意味でも、梅田川は本校の「たから」です。

人が「豊かな人間」になるためには、ゆるやかな流れと多くの感動が必要なのです。

「梅田川水辺の楽校に想う」 大槻 孝 (緑区みどりんぐクラブ)

私は、緑区の「水と緑の回廊」事業に3年間参加してき、ただ夢中で過ぎた三年間であったが、楽しく過ごせた原因を辿ってみると、先ずは、行政側の真摯な態度に敬意を表するが、公募者の積極的で相互に打ち解けた気心がグループの輪を確かなものにして、さらにそれを信頼できるリーダーが引っ張っていくという三拍子そろった条件があったものと信じている。先日、環境保全にかかわるサークルの成功例の涙ぐましいお話を伺ったが、いずれも楽しい行事をふんだんに盛り込んで努力した成果だと一様に述べられた。しかし、確かにそれもあるだろうが、それはグループの輪を固めるための手段であって、本当の原因は、利き目を持ったリーダーの指導であったのではないかと想う。梅田川水辺の楽校(ワークショップと協議会を含めて)は、若干異質の「つどい」で同等には考えられないかも知れないが、もう一度組織を再構築して、参加者が主体になったような「つどい」にして、利き目を持ったリーダーを参加者の投票によって決めて再出発するとよいと考えている今日このごろである。

